

石川県立美術館だより

平成13年11月1日発行 第217号

第48回 日本伝統工芸展 金沢展

11月2日(金)~11月11日(日) 会期中無休 午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)



日本工芸会奨励賞 蒔絵漆箱「夜光」 坂本康則



日本工芸会保持者賞 象嵌臙銀花器「岑寂樹林」 中川 衛

目次

第48回日本伝統工芸展金沢展.....2	図書閲覧室NOW6
茶道具と婚礼調度、石川県の名宝3	貸出中の所蔵品、企画展示室6
常設展示室 主な展示作品4	企画展TOPIC、十一月の行事案内他7
展覧会回顧、美術館小史・余話(16).....5	所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 ...8
各地の展覧会、美術館の本.....5	

常設展示室で音声ガイドサービスを開始!!

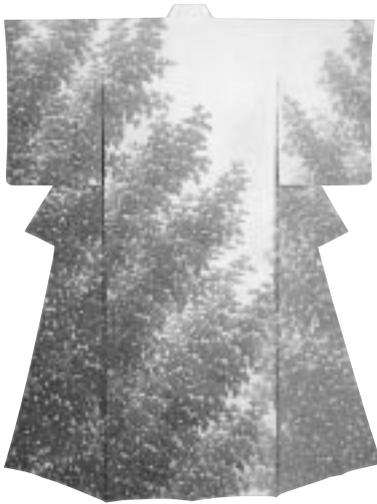
ホームページアドレス <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

第48回日本伝統工芸展 金沢展

11月2日(金)~11日(日)会期中無休

主催 / 石川県教育委員会・日本放送協会
朝日新聞社・北國新聞社・日本工芸会
後援 / 文化庁・富山県教育委員会・福井県教育委員会



友禅訪問着「いざない」 毎田健治



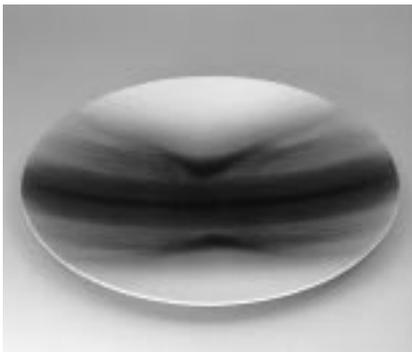
平文箱「富士瑞鶴」 大場松魚

恒例の日本伝統工芸展金沢展を開催いたします。わが国は、各地の風土に根ざした工芸品を生み出し、そして、その伝統技術を大切に継承し発展させてきました。本展は、優れた伝統技術の保護と後継者の育成ならびに伝統工芸に対する普及を目的として開催しているものです。

陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・その他の工芸(七宝・硝子・瑪瑙細工・截金・撥鏤など)の七部門の入選作品と遺作などの七百五十一点の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の基本作品と、石川県、富山県、福井県及びその他の県の入選作品三百五十四点を展示します。

今回石川県内の入選者は九十六人で、都道府県別ではトップの人数です。金工の中川衛氏が日本工芸会保持者賞、漆芸の坂本康則氏が日本工芸会奨励賞をそれぞれ受賞しました。

また、本年度の「特別展示 わざを伝える」は陶芸『練上手』伝承者養成研修会の制作品を展示いたします。また、同研修会の研修風景を収録したビデオを上映いたします。



耀彩鉢「暁光」 徳田八十吉



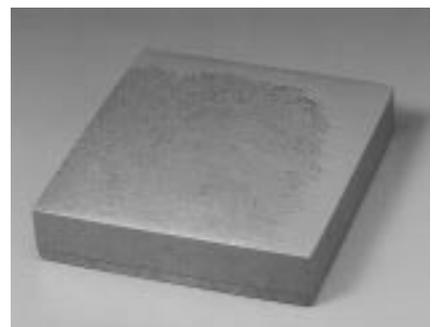
平文八角箱「爽宙」 市島桜魚



釉裏金彩芙蓉文鉢 吉田美統



樺造華文器 川北良造



沈金箱「萩衣」 前史雄

講演会 聴講無料

演題 私の一代之職
講師 奥山峰石氏
(重要無形文化財「鍛金」保持者)

日時 十一月四日(日)午後一時三十分
会場 当館ホール

◆列品解説
会期中、十一月二日午前と四日午後を除く毎日、午前十一時と午後一時三十分の二回、人間国宝の先生を含む出品者などによる列品解説を行います。

◆テレビ放映
北陸三県のNHK総合テレビで本展の放映があります。日時は未定ですが、展覧会会期中に放映します。

観覧料

個人	一般 600円 大学生 400円 高校生以下は 無料
団体(20名以上)	一般 500円 大学生 300円 高校生以下は 無料

当館友の会会員は受付での会員証提示により、団体料金でご覧になれます。

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

茶道具と婚礼調度

11月1日(木)~26日(月)

戦国武将にとつて茶の湯は、道具組みにおける作意や、その解説という作業をとおして、自己の精神の柔軟性を鍛えるとともに、参加する他の武将の力量を測る場であったと考えられます。前田家と茶の湯について考える際に、まず茶の湯が人物を評価する重要な機会であったことを思つと、前田利家が豊臣秀吉の政権下で自己の地位を確立できたのは、その戦略的手腕もさることながら、数寄者としての力量が秀吉に認められたことも重要な背景となつていと考えることができます。続く利長、利常ら歴代の加賀藩主も茶の湯を深く嗜み、また千利休や織田有楽、高山右近そして小堀遠州ら、ある意味で微妙な立場にいた茶匠との交流によつて、豊臣氏から徳川氏への政権移行を、自己の立場を保持しながら、巧みに乗り切る術を心得ていったと考えることもできるでしょう。

今回の展示では、前田家の家紋が梅鉢であることを前提として所持された、梅花天目とも呼び慣わされている玳瑁(たひごま)天目茶碗や「孫六」の銘を持つ古瀬戸茶入など遠州ゆかりの道具から、茶の湯に対する前田家の思いの一端をしのぶことができます。

また今回は婚礼調度も合わせて展示します。筆頭の外様大名であった前田家は、かつて豊臣家と極めて近い関係にあつたこともあり、その動向は常時徳川幕府から注視されてきました。そうした緊張関係を和らげたのが、一つは遠州のような幕府の作事奉行でもあつた茶匠との交流であり、そして何よりも大きな効果をもたらしたのが、徳川家との婚姻です。三代藩主利常が二代將軍秀忠の二女珠姫を迎えて以来、前田家にはしばしば徳川家の姫が輿入れしています。今回は、十三代藩主斉泰に文政十(一八一七)年に嫁いだ、十一代將軍家斉の二十一女階子(まごこ)、すなわち澄姫ゆかりの葵紋繪調度を展示します。

江戸時代の加賀藩主前田家は、文化政策を行ったことがよく知られています。今日、石川県に歴史的、あるいは芸術的にも優れた文化財が数多く伝えられているのは、このような歴史的背景が大きく関係しているといふことは言つまでもなく、さらには、今日の石川県における文化全般に対する関心の高さも、こうした文化風土を物語っています。

当館では美術工芸品を中心とした、このような文化財の収集を行つており、保存と活用を目的として、県内の社寺や個人の方々から多くの寄託を受けています。毎年恒例の展示ですが、国宝・重要文化財に加えて、重要美術品・石川県指定文化財などを含む、当館所蔵品・寄託品の中から、絵画・書・工芸・刀剣・埴輪の十五点を公開いたしますので、ご鑑賞下さい。

それでは、今回公開する作品の一部をご紹介します。

重文 埴輪 犬
重文 埴輪 男子立像

埴輪は、古墳の上または周囲に立てられた土器です。円筒埴輪と形象埴輪とがあり、後者は円筒の上に入物・動物・器具・家屋などをかたどつたものです。古墳時代(三世紀末~六世紀半ば)に盛んに制作されたわが国独特の、素朴で明快な芸術性に富んだ彫塑的な作品です。この犬の埴輪は数ある動物埴輪の中でも傑出した作品で、前足を反らせて後ろを振り返り、聞き耳を立てている犬の表情の瞬間的な動きや、習性を巧みに捉えています。また、男子の埴輪は武人の全身像です。胄をかむり、髪を美豆良に結び、上衣と袴を着け、手には籠手、腰には太刀を佩いています。顔の表情はおだやかで親しみやすく、その単純化された表現美が埴輪の魅力といえます。どちらの埴輪も群馬県の天神山古墳から出土したものです。

重文 四季耕作図(部分) 久隅守景



重文 埴輪 犬

常設展示室(第2展示室)

特集

石川の名宝

11月1日(木)~26日(月)



石川の人形

第5展示室の一角を使って、所蔵品・寄託品を中心とした特集というかたちで行ったものでしたので、出品作家を、石川県の人形作家の中から、下口宗美・紺谷力・井口十糸・室田芳子、そして石川県にゆかりがある日展の人形作家・齋藤悦子の五人に絞ってその作品を紹介しました。

石川県で人形というジャンルのみならず、作家として多大な影響を与えた下口宗美と、現在県内で活躍する紺谷力・井口十糸・室田芳子の各作品を並べると、こちらの想像以上に、それぞれの個性が際立ちながらも、雰囲気のある展示となりました。

また今回初めて展示した、齋藤悦子作品十点については、父上が金沢のご出身であり、戦後の一時期同地に滞在し、遺言でお墓もこちらにというほど金沢に思い入れて下さっていたということで、関係者の方の尽力によりご遺族から寄附いただいたものであり、金沢の人々にこれらの優美な木彫人形を紹介出来たことは、大変喜ばしいことでした。

また、人形は「ひとがた」でもあるために、身近なものとしてとらえて鑑賞している方も多く、土曜講座でこの特集に関連した話をしましたが、お聞きになって下さった方々は、こけしなど生活に身近なものに関連づけていることが印象的でした。美術工芸品としての多彩な人形の世界を紹介するという展示趣旨でしたが、どのようなかたちにせよ、展示した作品に関心を持っている方々の存在を強く感じさせました。

最後になりましたが、今回の特集の開催にあたって出品作家、そのご遺族及び関係者の方々に、この場をお借りして深く感謝いたします。

(文中敬称略)
(寺川 和子 学芸員)

美術館小史・余話

16

嶋崎 丞 当館館長

総合調査の実施は、まず能登地域から始めようということになった。能登は、地域の文化や歴史と密接に関係した文化財が、古い形そのまままで伝世している場合が多いと判断したからである。能登の調査については、古文書や民俗資料、石造文化財や考古資料などを中心とした九学会連合調査や、土居次義氏の長谷川等伯(信春)の調査がある位で、美術工芸全般にわたっての調査は、未だ実施されていなかった。そうした意味で、美術館の調査は、期待を持って迎え入れられたのではなからうかと思っている。

調査の対象となったのは、いうまでもなく寺社、それに十村を中心とした旧家であり、そこに伝世する美術工芸品であった。今日能登地域には各市町村指定の文化財が所在しているが、それらの文化財のリストを見てみると、私共の調査によって拾いあげられたものが相当数あり、この調査の果たした役割を、十分に見ることができるとはなからうか。

調査は昭和四十一年八月上旬の最も暑い時期に実施されたが、その当時、能登の道路はあまり舗装がされず、しかも自動車に冷房が無かったため、窓を開け砂埃をたてて走り回る。おかげで一日の調査が終了する頃は埃まみれであった。門前町では宿舎が総持寺だったが、こつした調査の連続であったためか、翌朝目が覚めたら何と朝の八時。朝のお勤めはもちろんだが、他の宿泊者全員も朝食が終わっていた。宿泊させていただいたのは奥の書院であったが、「奥の書院で宿泊し、このような朝寝をしたお客は、総持寺始まって以来初めてである。」と雲水に諭され、大いに恥をかいた次第である。

文化財所在総合調査の実施(一)

各地の展覧会

十一月

開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

- 現代の布 染と織の造形思考 11/18まで
- 東京国立近代美術館工芸館(東京都千代田区・〇三三三三) 七七八(一)
- 20世紀イタリア美術 みつたて、100の物語 12/2まで
- 東京都現代美術館(東京都江東区・〇三三三三) 四一(一)
- とやま現代作家シリーズ「こころの原風景」 11/25まで
- 富山県立近代美術館(富山市・〇七六四二) 七一(一)
- 時の旅人たち1980年以降の美術 11/17/1/20
- 愛知県美術館(名古屋市中区・〇五一九七二) 五五(一)
- 生誕100年記念 小松均展 10/30/12/9
- 京都国立近代美術館(京都市左京区・〇七五七六一) 四一(一)
- 主題としての美術館―美術館をめぐる現代美術 10/25/12/11
- 国立国際美術館(吹田市・〇六六八七六) 二四八(一)
- 華麗なるアール・ヌーヴオー
- 花の様式 ナンシー派美術展 11/11まで
- サントリーミュージアム天保山(大阪市港区・〇六六五七七) 〇〇〇(一)
- 第53回正倉院展 11/12まで
- 奈良国立博物館(奈良市・〇七四二二二) 五九六(一)

美術館の本

- 石川県立美術館所蔵品図録 税込定価(円)三、五〇〇
- 没後10年 高光一也展 二、〇〇〇
- 石川県立美術館所蔵 茶道美術名品図録 二、五〇〇
- 加賀藩二代藩主前田利長の菩提寺 瑞龍寺展 二、三〇〇
- 15/20世紀のロシア美術 イコンと絵画 二、〇〇〇
- 日本のわざと美展 重宝無形文化財とそれを支える人々 二、〇〇〇
- 前田利為と尊経閣文庫 二、〇〇〇
- 工芸作品と図案 創造への思考 二、〇〇〇
- 前田利為後400年 利家がまた 桃山時代の美術 二、五〇〇
- 没後25年 写実と幻想の巨匠 宮本三郎 二、三〇〇
- 初公開 欧州随一の日本美術コレクション ランゲン夫妻の眼 二、〇〇〇
- 石川県立美術館所蔵 九谷名品図録(改訂版) 二、〇〇〇
- 没後15年 一期は夢よ 鴨居玲展 二、〇〇〇
- 彫刻家 吉田三郎 二、〇〇〇
- 花の様式 ナンシー派展 二、二〇〇
- 花と緑の名品展 ―自然との対話― 二、〇〇〇

ミュージアムショップで販売中!!

郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。

(☎〇七六 二三三 七五八〇)

図書閲覧室NOW

新着図書紹介

今回ご紹介するのは『松永耳庵コレクション展』(福岡市美術館編)です。

松永耳庵とは、大正・昭和前期を中心に活躍した財界の巨人で、電力業界の指導的役割を果たした松永安左工門氏(明治八年〜昭和四十六年)のことです。松永氏は、また茶人としても知られ、さらにすぐれた古美術のコレクターとして名を馳せていました。その蒐集品は、現在、主に東京国立博物館と福岡市美術館に収蔵されています。本年が松永氏の没後三十周年にあたることから、この二館が協力して、そのコレクションを一堂に集めた展覧会が、本展(福岡市美術館、そのあと東京国立博物館で開催)なのです。その内容はこの図録を見ればわかりますが、実に質が高く、幅の広いもので、コレクターとしての松永氏の眼力のすばさの一端を知ることができるでしょう。

ちなみに、当館の茶道コレクションは、よく知られているように、仁清作「国宝 色絵雉香炉」をはじめとして、故山川庄太郎氏が蒐集した作品が核となって形成されています。それらがまだ山川家に秘蔵されていた昭和十二年頃、松永氏は、その名器を拝観しようと金沢を訪れました。松永氏は、門外不出の逸品を見て、「矢張り金沢にはよい道具があるな」と感嘆し、もう一度行きたいとも言ったといえます。当時すでに、山川氏の蒐集品の質の高さは、わが国一流の茶人識者が、認めるところであったのです。

* 開室時間は午前九時三十分〜午後四時三十分。貸出し、コピーサービスは行っておりません

貸出中の所蔵品

真如堂手茶入 銘古寺 瀬戸

熊川茶碗 銘沢辺

黄瀬戸根太香台

計三点

展覧会 茶道美術名品展

会期 十一月十一日(日)まで

会場 金沢市立中村記念美術館

曲輪造朱溜金彩盤

赤地友哉作

友禅薄茶地金銀摺箔花びら散文振袖「響秋」

鑄銅象嵌六方花器

羽田登喜男作

太刀 銘傘笠正峯作之平成七年八月日

金森映井智作

大般若理趣分経之箱

氷見晃堂作

截金彩色八花香盤「御法」

西出大三作

計六点

展覧会 「日本のわざと美」展

重要無形文化財とそれを支える人々

会期 十月二十日(土)〜十一月十八日(日)

会場 愛媛県歴史文化博物館(愛媛県宇和町)

琅玕釉花瓶

初代宮川香山作

色絵草花文浮彫火鉢

初代宮川香山作

染付黄釉立葵図花瓶

初代宮川香山作

釉下色絵群虫図花瓶

初代宮川香山作

計四点

展覧会 世界を魅了したマクス・ウエア

真葛 宮川香山展

会期 十月二十八日(日)〜十一月二十四日(月・振休)

会場 横浜美術館

企画展示室

第86回二科展金沢展

十一月十五日(木)〜二十六日(月)

(第7〜9展示室)

二科展を平成十年以来三年ぶりに金沢で開催いたします。絵画では理事長の鶴岡義雄(日本芸術院会員)、吉井淳二(文化勲章受章者)、織田廣喜(日本芸術院会員)や彫刻の淀井敏夫(文化功労者)らの各氏の重鎮に加え、写真でも秋山庄太郎、大竹省二各氏らの人気作家が出品します。

入場料

一般九〇〇円 中学生七〇〇円 小学生五〇〇円

(団体料金は各二〇〇円引き)

当館友の会会員は、会員証提示により団体料金。

連絡先 金沢市香林坊二五 一北国新聞社事業局

☎〇七六 二六〇 三五八一

アート・ナウKANAZAWA 第40回記念北陸中日美術展

十一月二十九日(木)〜十二月九日(日)

(第7・8・9展示室)

部門 平面・立体(工芸を含む)

現代美術の創造を目指す本展は、新人作家の登龍門として幾多の新進作家を送り出しており、毎年、個性豊かな力作が数多く出品されます。

全国から応募のあった作品を、美術評論家・針生一郎氏、多摩美大教授・建畠哲氏の両先生に審査していただき、選ばれた作品約百五十点を展示します。

入場料

一般・大高生九〇〇円(七〇〇円) 中学生以下無料

()内は団体料金

当館友の会会員は、会員証提示により団体料金。

連絡先 金沢市香林坊二七 一五

☎〇七六 二三三三 四六四二
北陸中日新聞事業部



(右) 雪人夫 昭和三十八年
(左) フードの女 昭和三十七年



企画展TOPIC

画風の変遷その二

高光先生は光風会と日展に出品されました。つまり春に光風会展、秋に日展ということで、年に二回力一杯の作品を発表する場を持つたわけです。これは二科や二紀、独立、新制作、国画といった、いわゆる在野の団体に所属する画家と違つところで、後者が年に一回それぞれの本展に研鑽の成果を問うのに対し、光風会や一水会に所属する画家は、本展とその集合体である日展に、出品の機会を持ちます。諸団体を糾合するものであった、かつての文展、帝展という官展の性格を、その後裔である日展が保っているわけです。これは当の画家にとつてはかなり大変なことだと思つのですが、おかげで、われわれは高光先生の半年ごとの大作をつぶさに見ることができ、ありがたいことだと思わざるをえません。

前回、作風がほぼ十年を一区切りに変わつていったと述べましたが、つまり私たちはその変遷を半年ごとにつかかえるわけです。作風は大きく四つに分けて考えることができます。1. 戦前、中村研一に師事してから、昭和二十六年まで テーマは農夫や働く人々の群像から室内

の女性像へと移りますが、写実をひたすら突き進めたもので、的確に色彩が施されているために人物を包む空気がうまく表現されていて、画技の高さがうかがえます。2. 二十七年から三十八年 その中でも細かく分けると、二十九年を境にその後では少し異なります。二十九年十一月から翌年八月までのヨーロッパ留学が転機となり、二十七年以降の変化に弾みをつけたといえましょう。このあたり、金沢という地方都市にありながら、時代を読む感覚は極めて鋭敏だと驚かざるをえません。つまり、時代は抽象へと向かいつつあるのですが、的確にその蠢動をキャッチし、そしてフランスという現場でそれを確認しているのです。これまでの細やかな筆遣いは、ペインティングナイフを用い、細部を省略した大胆な作風へと転ずるのですが、やがて色彩も減じ、白と青を基調としたものへと変わります。抽象への接近を見せた時期、言葉をかえれば、人物という具象をどう抽象と折り合いをとるか。実験が続きます。どちらかといえば穏健・中庸の光風会、日展の中で、先端を突つ走つたわけです。3. 三十九年から四十七年 写実へ戻り、色彩を回復し、女性美をたたえる作品が描かれます。「フードの女」はその到達点を示すもので、おそらく、高光先生

の全作中最も華麗な作品といつていいかと思つています。4. 四十八年以降逝去される六十一年まで これまでの作風の集大成を目指したといふべきでしょう。白色をすべての色彩にすり込み、岩絵具のような色調と肌合いを持つ画面を作り上げます。描かれるのは室内を出て、ギリシャやローマの遺跡にたずむる日本女性。この時期の作風を、油彩の和洋化の典型と讃えた評論家がありました。それは絵肌だけのことではなく、その美人画という描かれたテーマも含めてのことだといえましょう。(二木伸一郎 学芸主査)

*「没後15年 高光一也展」
平成十四年一月四日(金)～二十七日(日)

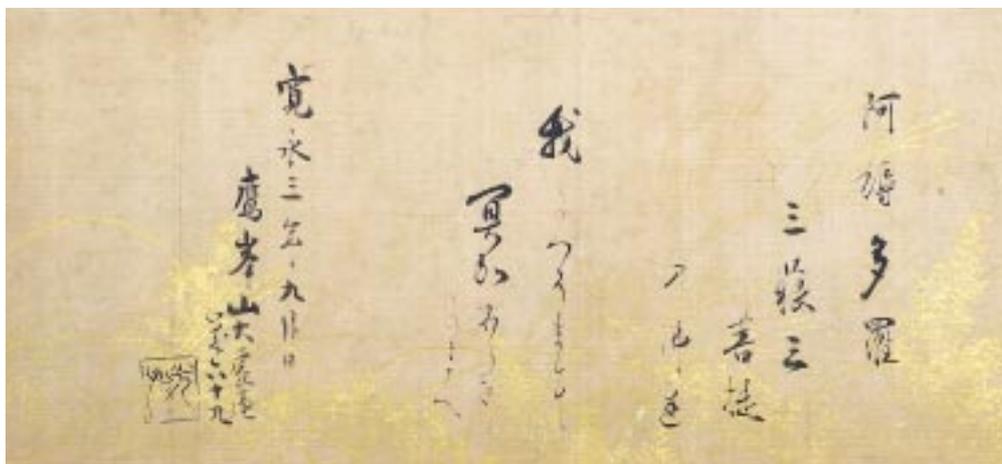
次回の展覧会

特集 天神画像と文房具(前田育徳会展示室)
特集 加賀の古刹―大乗寺の名宝(第2展示室)
十一月二十九日(木)～十二月二十四日(月・振休)

十一月の行事案内 《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
11/4(日)	講演会	「私の一代一職」講師 奥山峰石氏(重要無形文化財「鍛金」保持者)	ホール
11/10(土)	土曜講座	仏像 39 寧楽のほけ	講義室
11/17(土)	土曜講座	日本の金工 10 茶の湯金	講義室
11/18(日)	CDコンサート	バッハのカウンター	ホール
11/24(土)	土曜講座	漆芸の魅力 6 沈金・蒔繪・彫漆	講義室
11/25(日)	月例映画会	甦る文化財 表装の技術(48分)	ホール

全館休館日は十一月二十七日(火)・二十八日(水)です。



薄木版下絵詩歌(和漢朗詠集)
本阿弥光悦

永禄元年(1558)~寛永14年(1637)

石川県指定文化財

寛永3年 1626

長さ668.2 幅32.6 (cm)

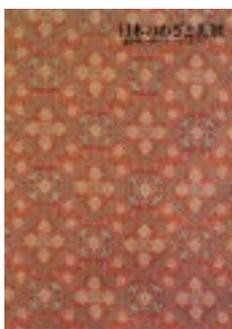
本阿弥光悦は、刀剣の鑑定や手入れを家業とする家柄に生まれました。そして光悦が生きたのは、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康によって天下統一が達成されてゆくという、まさに激動の時代でした。特に戦国大名の情報源とも言える刀剣を取り扱う家業は、必然的に一族を事情通とし、結果として時の権力者が一目置く存在にしました。

元和元年(一六一五)豊臣氏の滅亡後、光悦は家康から京都の北の鷹峯の地を与えられ、一族とともに移住します。ここには恐らく本阿弥一族の政治的な影響力を封じる家康の意図も多分にあったと思いますが、鷹峯での一族の活動はその流れに逆らわず、法華信仰を明確にしてゆきます。能書家として世に知られた光悦の書を見ると、鷹峯移住後は法華宗の仏典や、今回取り上げたような「和漢朗詠集」を書くことが多くあります。この作品は、寛永三年九月日鷹峯山大虚庵行年六十九という奥書があることから、光悦の書の展開を考える上での貴重な標準資料となるものです。そして伝教大師(最澄)の、「我が立つ杣に冥加あらせたまえ」という歌が巻が結ばれていることも注目されます。この歌は、比叡山を法華経信仰の拠点としたいという願いに諸仏の加護を求めて詠まれたものです。それゆえここには、鷹峯に対する光悦自身の真摯な願いが託されています。

ミュージアムショップ通信

恒例の日本伝統工芸展が始まります。ところで重要無形文化財保持者(いわゆる人間国宝)で、石川県出身の認定者が何人いるか知っていますか?。亡くなった方を含めて十六人、さらにこれに一団体が加わるのです。認定されている人は全国で約百四十人ほどですから、さすが!工芸王国といわれるだけのことはありますよね。今年の入選者数も、全国で石川県が一番多かったそうです。

そこで伝統工芸関係の図録では、「日本のわざと美」展―重要無形文化財とそれを支える人々―、そう、これがおすすめ。この手の紹介本は世に多々出回ってはおりますが、この本は人間国宝だけではなく、たとえば漆を塗るための刷毛を作る人、漆工品や金工品の製作・修理に欠かせない研ぎ炭を作る人など、舞台上立つ作品を陰で支える「わざ」へも、しっかりと目を向けているのです。三年前の展覧会図録ですから、最近認定された方々のことは収録されていません。でも、まずはこの図録にちよつと目を通してからご来場下さい。作品を見る目が、ひと味もふた味も違ってきますよ。



『日本のわざと美』展と重要無形文化財を支える人々(定価2,000円)

休館日

十一月二十七日(火)・二十八日(水)

石川県立美術館だより

第二一七号 平成十三年十一月一日発行

〒九二〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三三)七五八〇

FAX 〇七六(一三四)九五五〇